うちてしだいいせき 打越岱遺跡から発見された縄文時代早期の土偶

打越岱遺跡は館山自動車道姉崎袖ヶ浦インターチェンジから南に約2kmの上泉地区に所在する遺跡で、小櫃川に合流する松川中流域右岸の標高約69mの台地上に立地しています(第1図)。これまで4回の発掘調査が実施され、主に縄文時代早期(今から約11,500年前~7,000年前)の遺構や遺物が発見されました(第2図)。

平成 26 年 4 月 21 日~ 6 月 2 日にかけて実施した第 4 次調査(調査面積 630 ㎡)において、縄文時代早期中葉(沈線文期)の土偶がほぼ完全に近い形で発見されました(第 3 図)。

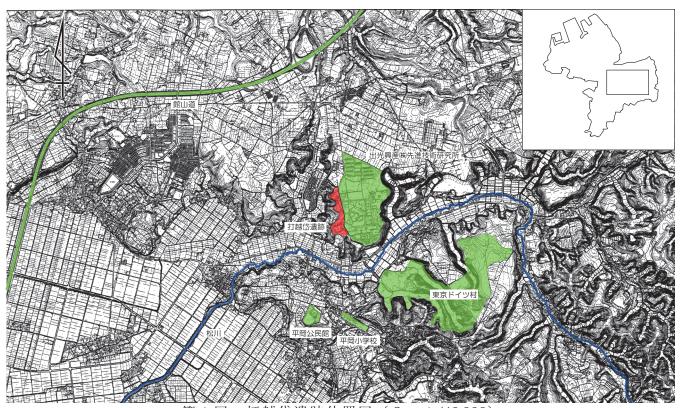
土偶というと、顔、手、足を備えた人の形を模したものを思い浮かべる方が多いと思いますが、縄文時代早期の土偶は明確に人の形を表現したものは少なく、乳房や腰のくびれ等により女性を表現したと思われるものが認められます。

打越岱遺跡で発見された土偶は胴部付近で上下に欠損したものが接合し、長さ 6.0cm、最大幅 3.0cm、厚さ 1.0 cm、重さ 15.5 gとなります。扁平な粘土を素材とし、上半部は十字状に成形し頭部と腕部を表現していると思われます。下半部は丸みを帯びた三角形状を呈します。表面には横位、斜位の沈線(細い線)が描かれ、裏面の下半部にも縦位の沈線が描かれます。

千葉県の成田市や香取市付近からは、より古い時期である撚糸文期から引き続き、沈線文期の土偶が比較的多く発見されていますが、全国的に見ても沈線文期の土偶の出土例は非常に少なく、しかも完全に近い形で発見されたものは今のところ知られていません。

このようなことから、打越岱遺跡から発見されたほぼ完全な形に近い土偶は、この時期の土偶の全体形状や撚糸文期から沈線文期への土偶の変遷など、縄文時代の土偶を考える上で極めて貴重な資料となります。

※本遺跡は整理作業途中であり、今回紹介した土偶を含めて今後報告書を刊行する予定です。



第1図 打越岱遺跡位置図(S=1/40,000)

	縄文時代									
旧石器時代		早期								
	草 創 期	前葉(撚糸文)	中葉 (沈線文)	後葉(条痕文)	前期	中期		晩期	弥生時代	古墳時代
				約3,400年前						
						約4,400年前 約5,500年前				
		約7,000年前 約11,500年前 ※年代は放射性炭素年代の較正曆年								
									曆年	
	ı 約16,000年前	代による								

第 2 図 縄文時代時期区分



第3図 打越岱遺跡出土土偶(S≒1/1)